「アクセント辞典」の表示方法の変遷
～「高低観」から「方向観」へ～

1 はじめに

2 これまでのアクセント辞典

2-1 棒式

2-2 棒カギ式

2-3 下がり目式

3 アクセント・音調に対する考え方の変遷
～「高低観」と「方向観」～

3-1 表示方法に関する, 1943年版が出るまでの日本放送協会での動き

3-2 表示方法に関する, 1943年版が出たあとの動き

3-3 2016年版の編集

塩田 雄大

1 はじめに

日本放送協会（NHK）では，放送で用いることばのためのアクセント辞典を，これまでに6回刊行してきている。この25年の間には1998（平成10）年版と2016（平成28）年版の2回の刊行があったが，2016年版への改訂にあたっては，これまでにない質的な変化があった。アクセントの表示方法の変更である。

この変更は，単に記号を見やすくしたとか，わかりやすくしたといったレベルの話ではない。日本語のアクセントや音調といったもののとらえ方そのものの違いにかかわる問題を内包しているものである。

本章では，1998年版から2016年版への改訂においてアクセントの表示方法の変更がどのように進められたのか，戦前からの流れもふまえた上で，その意味・位置づけと具体的な経緯を記録しておく。

2 これまでのアクセント辞典

下記に，これまでのアクセント辞典の概要を示す。

表1　これまでのアクセント辞典

	1943年版	1951年版	1966年版	1985年版	1998年版	2016年版
収録語数	4万4千	4万7千	7万	6万6千	6万9千	7万5千
ページ数	830	803 ＋付録27	1,096 ＋付録138	990 ＋付録206	1,023 ＋付録231	1,484 ＋付録255
価　格	3円80銭	380-450円	1,400円	3,300円	3,800円	5,000円
表示方法	棒式	棒式	棒カギ式	棒カギ式	棒カギ式	下がり目式
おもな委員	新村出, 神保格, 土岐善麿	土岐善麿, 金田一京助, 岩淵悦太郎	平山輝男, 金田一春彦, 秋永一枝, 桜井茂治	平山輝男, 金田一春彦, 秋永一枝, 桜井茂治	平山輝男, 金田一春彦, 秋永一枝, 桜井茂治, 馬瀬良雄, 菅野謙	水谷修, 井上史雄, 上野善道, 相澤正夫

（収録語数は概数（本文掲載語のみ），加治木美奈子（1998）および太田眞希恵・東美奈子（2016）などをもとに作成）

1943年版の成り立ちについては塩田雄大（2008・2014）でも取り上げたが，例えば日本放送協会から出された『昭和十六年 ラヂオ年鑑』には下記のような記述が見られる。

○**放送用語アクセント辞典**－これは新村出博士編纂の『言苑』を底本とし神保格・常深千里両氏共著の『国語発音アクセント辞典』を参照として日常放送に必要な語彙を中心に，アナウンサー側の協力を得て屡々慎重な審議を重ねて編集したものである。目下印刷中につき，近く配布の見込である。
（日本放送協会（1940），p.40。原文は縦書き。漢字は現代のものに置き換えた（以下同）。）

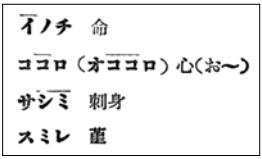
これ以降の版のアクセント辞典に関しては，これまでの『文研月報』『放送研究と調査』や『NHK放送文化研究所年報』等に関連する論考が掲載されている。

アクセントの表示方法について，きわめて簡単に記す。アクセントを表示する方法にはさまざまなものがあるが，ここではこれまで日本放送協会のアクセント辞典で採用したことのある3種類の方法についてのみ示す。

2-1 棒式

ある語に関して，「高く発音する部分」の上に線（棒）を引いて表示するものである。ただし，平板式の語には，何も線を付さない決まりごとになっている。線式・直線式・傍線式などと呼ばれることもある。

【1943年版の「イノチ」「ココロ」「サシミ」「スミレ」】


イノチ　命
ココロ（オココロ）心（お～）
サシミ　刺身
スミレ　菫

【1951年版の「イノチ」「ココロ」「サシミ」「スミレ」】

イノチ　命
ココロ　心
サシミ　刺身
スミレ　菫

2-2　棒カギ式

ある語に関して，「高く発音する部分」の上に線（棒）を引き，さらに「音が下がるところ」がある場合にはそこにカギ（┐）を示すものである。平板式の語にも高く発音する部分に線（棒）を引くが，音が下がるところはないのでカギは付さない。

【1966年版の「イノチ」「ココロ」「サシミ」「スミレ」】

イノチ　命
ココロ　心
サシミ　刺し身
スミレ　《×菫》〔植〕

【1985年版の「イノチ」「ココロ」「サシミ」「スミレ」】

イノチ　命
ココロ　心
サシミ　刺身，差し身（相撲）
スミレ　《菫》〔植〕

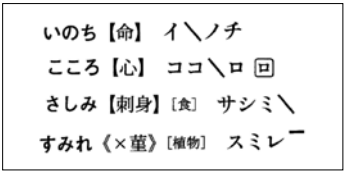
【1998年版の「イノチ」「ココロ」「サシミ」「スミレ」】

イノチ　命
ココロ，ココロ　心
サシミ　刺身，差し身（相撲）
スミレ　《菫》〔植〕

2-3 下がり目式

ある語に関して，「高く発音する部分」は示さず，「音が下がるところ」だけを下がり目（ ＼ ）で明示する。また，これと同じ発想に基づき，補助的な表示方法として，音が下がる手前の拍を□で囲んだカタカナ（平板型は□のみ）で示す方法も併用している。こちらは，第二推奨形（二番目のものとして示すアクセント）の表示に用いられている。なお前節で「棒カギ式」について述べたが，この「カギ」と「下がり目」は記号の外形が異なるだけであり，意味するところは同じである。

【2016年版の「イノチ」「ココロ」「サシミ」「スミレ」】


いのち【命】 イ＼ノチ
こころ【心】 ココ＼ロ 回
さしみ【刺身】〔食〕 サシミ＼
すみれ《×菫》〔植物〕 スミレー

3 アクセント・音調に対する考え方の変遷 ～「高低観」と「方向観」～

2016年版で下がり目式を採用した理論的な背景については，この2016年版の巻末pp.7-13に記してあり（実際の音の上がり下がり（音調）を生み出すのにあたって，「高く発音する部分」がどこであるかを明示する必要はないこと，明示してしまうとむしろ不自然な言い方を誘発しかねないため示すべきではないことなど），ここではあまり深くは立ち入らない。

まず，1943年版と1951年版で採用されていた棒式は，「語の中で，どの部分が高くて，どの部分が低いか」という「高低観」に立脚した方式である。それに対して下がり目式は，「語の中で，（ある拍とある拍との相対的な音の高さの関係として）音が大きく下がる（音の高さが下方向に変化する）ところはどこか」という点に着目したもので，こちらは「方向観」

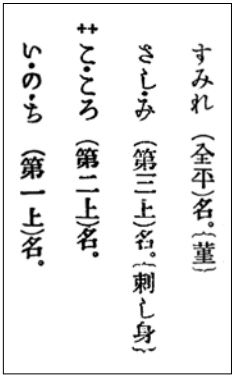
に立脚した方式である。そして，1966年版・1985年版・1998年版で採用されていた棒カギ式は，一見この両者の折衷案であるように見えるが，音調に対する観点としては棒式にきわめて近く，「高低観」の性格が色濃いものである。

3-1 表示方法に関する，1943年版が出るまでの日本放送協会での動き

2016年版で採用された下がり目式は，そしてその観点の根本にある「方向観」は，突然あらわれたものなのだろうか。決してそんなことはなく，1943年版が出る前から，そして出たあとも，放送用語委員会での議論の中でしばしば顔を出していた。

なお，日本で最初にアクセントを掲載した明治期の国語辞書『日本大辞書』（山田美妙著，1892-1893）は，アクセントの表示として，それぞれの語に（第一上）（第二上）（第三上）（全平）などと付している。これは音が下がるところを漢数字で表したものであり（（全平）は平板式），明らかに「方向観」に基づいたものである。

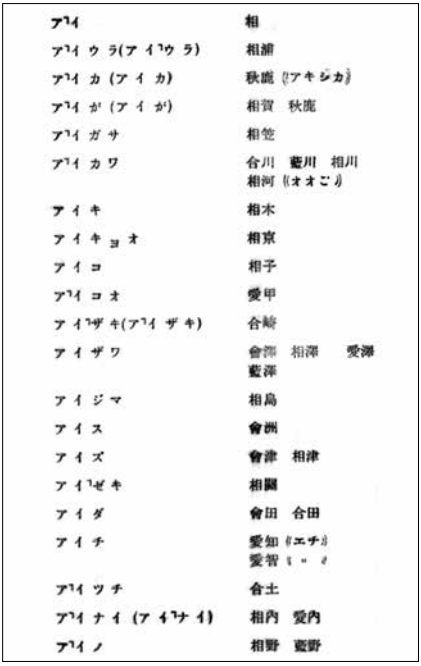
【日本大辞書の「いのち」「こころ」「さしみ」「すみれ」】


すみれ（全平）名。〔菫〕
さし・み（第三上）名。〔刺し身〕
こ・ころ（第二上）名。
い・の・ち（第一上）名。

【1934年】 ～下がり目式の芽生え～

放送用語委員会（この当時の正式名称「放送用語並（ならびに）発音改善調査委員会」）においては，発足初期のころに，アクセントをどのように表示すべきかについての議論があった。この委員会が発足したのは1934（昭和9）年1月であるが，この年の11月13日に開かれた第17回委員会で示された資料の一つに，「苗字の読み方及アクセント表」「動詞アクセント表」というものがある。この中の単語一覧表では，「アクセント表記法A」としてカギ式（音が落ちるところに ˥ を記し，平板型は無記号）が，「アクセント表記法B」として高く発音する部分のカナを太字で示すという方法が示されている。このカギ式は，2016年版の下がり目（ ＼ ）とは外見上の形が異なるだけで，発想としては同様である（塩田雄大（2014）p.118）。

【苗字の読み方及アクセント表　アクセント表記法A】



ア˥イ	相
ア˥イウラ(アイ˥ウラ)	相浦
ア˥イカ(アイカ)	秋鹿 〔アキシカ〕
ア˥イガ(アイガ)	相賀　秋鹿
ア˥イガサ	相笠
ア˥イカワ	合川　藍川　相川 相河 〔オオゴ〕
アイキ	相木
アイキョオ	相京
アイコ	相子
ア˥イコオ	愛甲
アイ˥ザキ(ア˥イザキ)	合崎
アイザワ	會澤　相澤　愛澤 藍澤
アイジマ	相島
アイス	會洲
アイズ	會津　相津
アイ˥ゼキ	相關
アイダ	會田　合田
アイチ	愛知 〔エチ〕 愛智 〔ｉ〕
ア˥イツチ	合土
ア˥イナイ(アイ˥ナイ)	相內　愛內
ア˥イノ	相野　藍野

【動詞アクセント表　アクセント表記法A】

アイスル	愛する
アイズスル	相關する
アイテドル	相手ざる
アイノリスル	相乗する
アウ	合ふ　逢ふ　遭ふ 遇ふ　會ふ
アエグ	喘ぐ
アエル	會へる（可能） （胡麻を）和へる
アオグ	仰ぐ　扇ぐ　煽ぐ
アオノク	仰のく
アオノケテ	仰のけて
アオムク	仰向く
アオムケル	仰向ける
アオザメル	青褪める
アオル	煽る
アガク	足掻く
アカジミル	垢じみる
アカス	明かす（夜を——）
アカズク	垢づく
アカセル	飽かせる（隙に飽かせて）
アガナウ	贖ふ　購ふ
アカバム	赤ばむ

【1935年】

日本放送協会では放送用語委員会での審議を経て1935（昭和10）年4月に『宮廷敬語』という冊子を出したが，この資料の索引（［アオヤマゴ ㇾショ　青山御所］から［ワカミヤヒデ ㇾンカ　若宮妃殿下］までの約500語）に，各語のアクセントがカギ式で示されている（塩田雄大（2014）p.118）。

【宮廷敬語】

【ナ】

ナイショ┐オテン	內掌典	37
ナ┐イジン	內陣	1
ナイシンノ┐オ(…ナイシンノオデ┐ンカ)	內親王(…內親王殿下)	5
ナラセラレ┐ル	成らせられる	13

【ニ】

ニイナメ┐サイ	新嘗祭	2
ニゴヨ	和世(和節)	4
ニシ┐タマリノマ	西溜の間	31
ニジュ┐ウバシ	二重橋	32
ニジュウバシマ┐エノ=ヒ┐ロバ	二重橋前の廣場	32

また，『音声学協会会報』誌上に，次のような記述が掲載されている。執筆したのは，日本放送協会の嘱託・三宅武郎である。

> アクセン［原文ママ］の簡略表記法といたしましては，アクセント契機の含まれてゐる音節に符号を附ければ実用の上では事足りると思ひますが，それには，その音節の前に附けるか，後に附けるか，あるいは抑音符式に上に附けるか，いづれにしてもよろしいわけです。私は，昨年，拙稿の「アクセント法」で，第四図のやうに，前へ附けて見ました。が，今度は，第五図の様に後へ附けて見ようかと考へてをります。
>
> 第四図
>
> ˈハシ（箸）　ハˈシ（橋）　ヤマˈザクラ（山桜）
>
> 第五図
>
> ハ┐シ（箸）　ハシ┐（橋）　ヤマザ┐クラ（山桜）
>
> カ┐イタケ┐レド　イヌ┐ガイマ┐ス
>
> （三宅武郎（1935），原文は縦書き）

ここで三宅が示したアクセント表示法は，2016年版と実質的に同じものである。

三宅はこのあと，1943年版のアクセント辞典の編集にあたっても中心的な役割を果たす（「本辞典の作成につきては，嘱託三宅武郎氏其他の編纂係員及び放送員諸氏の少からぬ努力を銘記せねばならぬ」（1943年版の序（p.2）），「旧版の作成に［中略］直接編集の仕事にあたられた三宅武郎氏」（1951年版のまえがき（p.2））。

【1936年】

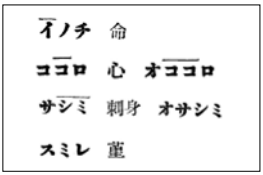
放送用語委員会では1936（昭和11）年12月にアクセントの問題をめぐる個別の語についての議論が始まるが，ここで示された資料では，カギ式ではなく，棒式（1943年版と同様の表示法）で記されている（塩田雄大（2014）p.118）。

【1938年】 ～棒式採用の正式確定～

放送用語委員会の記録を見ると，1938（昭和13）年2月24日に，神保格（放送用語委員）と三宅武郎（事務局側）で協議した結果，これから編集するアクセント辞典での表記方法として，直線式〔＝棒式〕を採用する旨が記されている（塩田雄大（2014）p.119）。これによって，1943年版では棒式が採用されることが正式に確定したのである。

神保格は1932（昭和7）年に『国語発音アクセント辞典』を出しており，そこでの表示方法は棒式である。上記の確定にあたり，結果的に神保の考え方が強く反映された形になっている。

【参考 『国語発音アクセント辞典』の「イノチ」「ココロ」「サシミ」「スミレ」】



また，1938年2月28日に，『アクセント表示 新辞海』という国語辞典が出された。アクセントを担当したのは，三宅武郎である。この辞典で

は，アクセントを棒式（三宅は「線式」と呼んでいる）で表示している。

【参考 『アクセント表示 新辞海』の
「いのち」「こころ」「さしみ」「すみれ」】

すみれ（菫）山野に自生する草本。○菫紫。菫紫色。
さしみ（刺身）魚のつくりみ。「まぐ
こころ（心）智・情・意の総称。思ひ気持。なさけ。意味。
いのち（命）たましひ、寿命。又大切なもの。

これに関して，刊行後の5月に三宅が記した文章に，次のようなくだりが見られる。

印刷上のことを考へると，アクセント符号の線式は非常に不便である。第一に組み手間が多くかゝる。従つて時間もおくれるし，賃銀も高くつく。校正も困難を極める。線式の校正が困難なこと，これは音声学雑誌編輯十年の経験から確言し得るところである。それを救ふためには，私は符点式がよいかと思ふ。符点式とは，線式における線の切れ目，即ち「アクセントの折り目」に点を打つのである。点は又カギでもよい。例を挙げると：——

やまざくら　ヤマザクラ

やまざ˙くら　ヤマザ˙クラ　ヤマザ˥クラ

右の内，カギ式は，日本放送協会（昭和十年一月刊）の「宮廷敬語」に試用してある。

線式は「アクセントの型」を示すのによく，ポイント式は「アクセントの折り目」即ち「アクセント契機」を示すによい。学習の上では先づ線式から入り，次に実用的にはポイント式がよいと私は考へてゐる。

(三宅武郎（1938），原文は縦書き。「宮廷敬語」が「一月刊」とあるのは，あるいは誤記か)

つまり三宅は，担当した国語辞典でのアクセント表示にあたって棒式（線式）を採用したが，音の下がり目のみを表示するカギや点（ポイント）のみを表示する方法〔=2016年版と同様の方法〕のほうが実用的であると感じていたのである。

3-2　表示方法に関する，1943年版が出たあとの動き

1943年版で採用された棒式は，1951年版でも引き続き用いられた。1966年版では棒カギ式に変更となり（その後1985年版と1998年版でも同様），平板型にも上線が示されるようになって（棒式では平板型は無印だった），また音の下がり目がある場合にはカギも付されるようになった。しかし，「音の高いところに上線が付される」という点において，棒式と棒カギ式は基本的にほぼ同じアクセント観〔=高低観〕に立っているものとみなしてよい。

このように，日本放送協会では，アクセントの表示にあたり，1943年版から1998年版が用いられていた期間中は，高低観に基づく棒式あるいは棒カギ式が標準となっていた。しかしそうした中でも，必要に応じて，方向観に立脚した表示方法を用いた例もあった。例えば早田輝洋（1965）（1968）［『文研月報』に掲載］や塩田雄大（1998）［『放送研究と調査』に掲載］などである。

アクセント辞典の類をひもといて，たとえば，動詞〈たべる〉のアクセントを見てみよう。そこには，タベ˥ル，タ˥ベテ，タベヨ˥ー（注1）などとなっているであろう。形態素（morpheme）（注2）〈タベ〉は，活用形によってタベ˥，タ˥ベ，タベ などと変化する。動詞仮定語尾〈レバ〉は，（タベ˥）レバ，（アゲ）レ˥バ のように，レバ，レ˥バ などとなる。助詞〈サエ〉は（ミズ）サ˥エ，（アクマ˥）サエ のようになり，同一の形態素も，さまざまなアクセントの型をもっている。

（注1） 以下，アクセントの核を ˥ で表わす。一般のアクセント辞典では，上の例は，タベル，タベテ，タベヨーあるいはタベ˥ル，タ˥ベテ，タベヨ˥ー などとなっている。

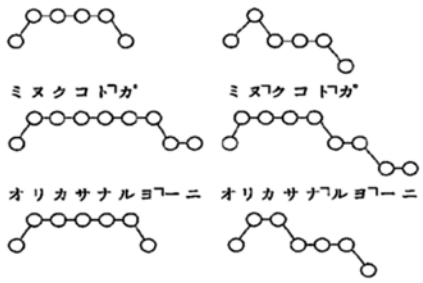
（早田輝洋（1965））

unmarked	a -ke-ta	（開けた）	kii -ta	<	kik -ta（聞いた）
marked	u˥-ke-ta	（受けた）	ka˥i-ta	<	ka˥k-ta（書いた）

（早田輝洋（1968））

なおここでは音の下がり目を ˥ という符号を用いて表示するが，これは『NHK日本語発音アクセント辞典 新版』での符号とは異なるものである。辞典の符号は「単語」を対象としたもので，音が複数回下降することがある「句」の音の高低をうまく表せないからである。

（中略）



（塩田雄大（1998））

3-3　2016年版の編集

3-3-1　改訂専門委員会第１回会議（2008年５月30日）

2016年版を編集する過程で，「アクセント辞典改訂専門委員会」が組織された。NHK放送文化研究所の放送用語班が事務局となり，外部の専門委員（水谷修氏・井上史雄氏・上野善道氏・相澤正夫氏）と，アナウンス室および放送文化研究所放送用語班のメンバーからなる委員会である。

初回の会議席上で委員から出された意見の一部として『放送研究と調査』誌上に記載されているものに，次のようなものがある。

> インターネット社会といわれる現代，コンピューターの機能でアクセントを表示する方法として，語の上部に線を引いて示す現在の方式は難しいこともあり，現行のアクセント記号の方式を見直す必要があるのではないか。　（坂本充（2008a））

このようにマイルドに記されているが，当日の実際の会議では，棒カギ式について，電子的に表示がしにくいという理由だけでなく理論的および実践的な観点からも見直しが必要であること，またその反論として，音の高いところもやはり表示したほうがよい，といった意見が活発に交わされていた。会議実施前には，事務局側では表示方法の変更までは想定していなかったのである。

このように，1943年版から続いてきた「音の高いところに上線を引く」という棒式および棒カギ式に対して疑問を投げかけるところから，このアクセント辞典改訂の議論は始まった。

3-3-2　改訂専門委員会第２回会議（2008年９月１日）

第２回編集会議では，１つめの議題として，アクセント辞典改訂作業にあたっての基本方針が審議された。この辞典で示すのはどのようなアクセントなのかという根本的な観点を明示・共有しておくことで，今後の作業

をぶれずに進行させる目的でおこなわれたものである。

2つめの議題として，アクセント記号の変更に関する事務局からの提案があり，この考え方（後述）は最終的には席上での議論を経て了承された。それまでの高低観から方向観への大転換となるものであるが，音の高い部分を表示しないことについて，当日の席上では第1回会議と同様に，委員からは賛意のみならず反対の意見も述べられていた。

『放送研究と調査』誌上に記録されている文言を，長くなるがそのまま引用して示す。

議題2　アクセント記号の変更について

これまでのアクセント記号より総合的に優れている新しい記号を採用する方向で，委員会としての合意を得た。

現行のアクセント記号は，音の「高い部分」と「アクセント核（音の下がるところ）」とを組み合わせた形式（棒カギ式）を採用している。

しかしこの表示方法は，たとえば

①「一部の語について，必ずしも音調の実態を表していない」

②「東京式アクセント地域以外の出身者や，日本語学習者（外国人）には理解がしにくい」

③「一部の長い語や，文のアクセント／音調を論ずるときに，使用することができない」

など，さまざまな問題点をはらんでいる。

〈説明〉

① 現行のアクセント記号による表示は，「語の1拍目と2拍目は必ず音の高さが異なる」という考えに基づいて成されている。
しかし，これは必ずしも定説とは言えなくなっている。
たとえば「オーエン（応援）」ということばのアクセントは，最初の「オ」を低く，そのあとの「ーエン」を高く発音するように記号が付けられている。
しかし，実際にはそのように発音されることはきわめてまれである。

② 東京式アクセント地域の出身者は，このようなアクセント記号が付けられた語について，自身の経験から「このアクセント記号どおりには発音しない」ことを，無意識に理解している。

しかし，それ以外の地域の出身者や日本語学習者にとっては，このようなこと（＝ある場合にはアクセント記号の表示どおりに発音してはならないこと）を意識的に学ばねばならず，自然なアクセントを習得するのにあたっての障害となっている。

③ また，現行のアクセント記号では，たとえば「ブッシュダイトーリョー（ブッシュ大統領）」ということば（「ブ」の後と「ト」の後の2回下降する）アクセントや，「キョートノテラオマワリマシタ（京都の寺を回りました）」という文（1文の中で複数回下降する）の自然な音調を，正確に表示することができない。
そのため，今回は「音の上がり目」と「アクセント核（音の下がるところ）」とを組み合わせて表示する方法を採用する。
また平板型については，その語が平板型であることを明示する記号を付す。

記号の例として挙げたうち，一部の語を記す。

平板	サ┌クラ¯	ア┌ルコール¯
尾高	イ┌モート┐	モ┌モノハナ┐
中高	ミ┌ズウ┐ミ	チョ┌コレ┐ート
頭高	┌サ┐ンカ゜ツ	┌ア┐クセント

【注1】2拍目に長音（ー）・二重母音の副音（イ）・撥音（ン）のあるものは，上昇記号を語頭に付す（これを「標準型」とする）

┌コーエン¯	┌コージョ┐ー
┌カイテン¯	┌サイケ゜┐ン
┌コンダン¯	┌ネンリョ┐ー

【注2】2拍目に促音（ッ）のあるものは，上昇記号を2拍目の後ろに付す（これを「標準型」とする）

キッ┌キン¯　キッ┌カ┐リ

議題の〈説明〉のような問題点を解消すべく，今回事務局で新しいアクセント記号を考案した。

審議では，アクセント記号の変更について，「従来の棒カギ式に慣れているので変えないでほしいという意見もある。採用する場合には十分な説明をしてほしい」という要望がアナウンス室の専門委員から

あった。

審議の結果，新しいアクセント記号を導入することを確認した。なお，記号の具体的な形については今後も継続して検討することになった。（坂本充（2008b））

このように，改訂専門委員会第2回会議において，それまでの高低観から，方向観に基づく記号を用いることが公的に了承された。ただしこの時点では，「下がり目」（実線カギ）だけでなく「上がり目」（点線カギ）も表示する形の案が示されていた。

3-3-3 改訂専門委員会第4回会議（2010年2月19日）

改訂専門委員会第2回会議のあと，NHKの全国のアナウンサーの協力を得て，現行のアクセント辞典で変更・追加・削除の対象となりうるアクセントや項目・語形の洗い出しをおこなった。また，アクセント辞典の具体的な内容に関して，自由記述での回答を収集した（坂本充（2009a））。その上で，改訂専門委員会第3回会議（2009年2月27日）が開かれ，アナウンサーから寄せられた指摘内容をベースに作成する「音声を流して答えてもらうアクセント調査」の実施をめぐって議論がなされた（坂本充（2009b））。

それからほぼ1年後に開かれた改訂専門委員会第4回会議（2010年2月19日）では，この調査の結果についての詳細な分析が報告されたあと，アクセントの表示方法に関する新たな事務局提案がなされた。ただしこれは記号の外形にかかわる提起であり，基本的な発想としては第2回会議でのものと変わりはない。下記に，『放送研究と調査』誌上の記録をそのまま示す。

・アクセント記号の変更について

次回のアクセント辞典では現行アクセント辞典での表記法である

「音調の高い部分に上線を引く」という方法を採用しないということが，第2回アクセント委員会（2008年夏）で決定されている。今回の委員会では，この理由と背景をあらためて説明した。そして，当面は“/”“＼”および“→”という記号を用いることで最終的にはおおむね合意が得られた。

“/”は，音調が高くなりはじめるところを示すものである。

“＼”は，アクセントの下がり目を示すものである。

“→”は，その語が平板型であることを示すものである。

今回のアクセント表記法は，現行の表記法では書き表せない音調パターンも，示すことができる。

・＜現行＞ ト̄リモ・ナオ̄サズ

⇒ ＜新表記＞ /ト＼リモ・ナ/オ＼サズ

・(現行方式では表記不能)

⇒ /ト＼リモナオ＼サズ

・ ヨ̄ム・ラシ̄ー

⇒ /ヨ＼ム・ラ/シ＼イ

（ただし不適切なアクセント）

・(現行方式では表記不能)

⇒ /ヨ＼ムラシ＼イ

（適切なアクセント）

今回の改訂では，アクセント辞典の本文中に掲げた用言（一部）について活用形を明示することを目指しており，その際にはこのアクセント表記法の採用が不可欠である。　（塩田雄大（2010））

上記にあるとおり，この時点での事務局案においても，「下がり目」を示す“＼”だけでなく，「上がり目」を示す“/”も表示する方式を示していた。なお，当初の事務局提出案では，「下がり目」が“↴”で，「上がり目」が“「”という記号であった（例えば　ア「ルコール→　チョ「コレ↴

ート 「ヨ ↴ ムラシ ↴ イ　のような表示)。委員から，今後ここでの表示方法（記号の使い方）が社会で一般化したときに，“ ↴ ”という記号は文字化けを起こしかねず，また“「 ”という記号では「音をそこで上げる」という趣旨が伝わりにくい，というアドバイスがあったことを受けて，“ ＼ ”と“ / ”　に変更となったものである。

3-3-4　改訂専門委員会第６回会議（2012年５月25日）

第４回会議のおよそ10か月後の2010年12月３日に，第５回会議がおこなわれた。ここでは，過去のアクセント辞典改訂をめぐる概況と，全国アナウンサーの協力を得て実施した「音声を流して答えてもらうアクセント調査」の詳細な結果分析ならびに改訂作業への反映方法についての報告がなされた（塩田雄大（2011））。その後，この会議のおよそ３か月後に東日本大震災があり，事務局側での改訂関連作業および委員会の開催はしばらく滞った。

その後2012年５月25日に，第６回会議が開かれた（塩田雄大（2012））。ここでは，各語の立項方式を，ある一つのアクセント型を１項目とした立て方〔=同音・同アクセントの語は１項目にまとめて示される（1951年版からの方式）〕から，かな見出しで引く国語辞典方式〔=1語１項目として表示〕に変更する旨の事務局提案がなされた。これは元放送用語委員の柴田武氏も在任中から主張していたものであり，晴れて日の目を見ることとなった。

また，アクセントの表示方法について，（下がり目を示す記号を用いるのではなく）音が下がる直前の拍を四角囲みで表示する方法が事務局から提案されたが，これに対しては賛意が得られず，席上で代案が検討され，これがひとまず承認された。下記に，『放送研究と調査』誌上の記録をそのまま示す。

「国語辞典方式」の採用に伴って，表示項目数がこれまでよりもか

なり多くなることが予測された。1冊の辞書として厚くなりすぎないように，スペースの節減が必要となってくる。そのため，第4回アクセント辞典改訂専門委員会（2010年実施）で確認したアクセント記号の表示法（塩田雄大（2010））についてはいったん保留とした上で，各項のアクセント表示法に関する諸試案を改訂事務局で作成した。

そのなかで，下記に示した一連の部分については，修正の余地ありと指摘された。理由は，事務局の趣旨はわかるものの，現行の表示方式にくらべて読みとりにくくなるということである。

（事務局原案の一部）アクセント表示法【当初案】
◎アクセント核のある拍を，カタカナ1文字で示す。
あたりくじ　リ[タ]　当たりくじ
アイデア　ア[デ]　idea
◎一語中，同音の拍が複数ある場合は，数字を付して何番目のものであるかを示す。
あたたか　[タ]^{2}[タ]^{1}　温か
あたたかさ　[タ]^{2}[カ]　温かさ
◎平板アクセントは「平」で示す。
あいでし　[平]　相弟子
あたまかず　[カ][平][マ]　頭数
◎複数の型がある場合は併記し，優勢な型を先に示す。許容アクセントは（　）内に示す。
（現行版の「伝」（伝統的）は残すかどうか検討）
あだうち　[平][チ]（[タ]）　あだ討ち
あいふだ　[平][タ]（[イ]）　合い札
◎二語意識のある語は「=」で区切りを示し，見出しのひらがなに半角スペースを入れて，語の区切りを示す。（「−」は長音記号のようで紛らわしいので「=」を使用）
あい なかばする　[ア=バ]　相半ばする
あいみ たがい　[ア][ア=平]　相身互い

この指摘を受け，席上で意見を出し合って修正案を模索した。そこで重視されたのは，「第1アクセント（推奨アクセント）型」については，見やすい形で強調して示すのがよいのではないかという発想である。このように第1アクセントをそれ以外のものから卓立させて示すという視点は，第4回アクセント辞典改訂専門委員会（2010年実施）

でも示されている（塩田雄大（2010）p.55参照）。

結果的に，第1アクセント型については2010年の原案どおり音調の上がり目と下がり目を示すこととし，おおむね以下のような案で合意を得た。

発音およびアクセント表示法【修正案】
基本方針〔書籍版〕
各項目は，左から順に，以下のように列挙して表示することにする。
①見出し
：現代かなづかいによる，かな表記。
外来語は見出しをカタカナで示し，原語表記は原則として載せない。
②放送での標準表記
③放送での発音と第1アクセント型
（推奨アクセント型）
：発音をカナで示し，音調の上がり目と下がり目をスラッシュ（／，＼）で表す。平板アクセントは末尾に→を付ける。
④共通語アクセント型
：共通語のアクセントとして十分認められる諸型（第1アクセント型も含む）を記載する。
アクセント核のある拍を，カタカナ1文字で示す。
一語中に同音の拍が複数ある場合は，数字を付して何番目のものであるかを示す。
平板アクセントは「平」で示す。
複数の型がある場合は併記し，優勢な型を先に示す。
【修正案】による表示例
あいにく　【生憎】ア／イニク→　平
アイテム　／ア＼イテム　ア
あだうち　あだ討ち【仇】
ア／ダウチ→　平ダ（ダ）　注）（　）は許容アクセント
あたえ　与え　ア／タエ→　平
あたえる　与える　ア／タエル→　平
あだおろそかに　あだおろそかに
ア／ダオロ＼ソカニ　ウ
あたかも　あたかも　／ア＼タカモ　ア
あたし　あたし〔俗〕　ア／タシ→　平
あだする　あだする〔古語〕　ア／ダ＼スル　ダス
あたたか　温か　ア／タタ＼カ　ダ^{2}ダ^{1}
あたたか　暖か　ア／タタ＼カ　ダ^{2}ダ^{1}
あたたかい　温かい　ア／タタカ＼イ　カ
あたたかい　暖かい　ア／タタカ＼イ　カ
あたまかず　頭数　ア／タマカ＼ズ　カ平マ
つづき　続き　ツ／ズキ→　平

なお周知のとおり，アクセント表示において本質的に重要なのは，下がり目（＼）である。それに対して上がり目（／）は，語単独で言うときには現れていても，前に修飾語がきた場合などには一般に現れない。たとえば下記の「男の子」では，〔オ〕から〔ト〕にかけての上がり目は，「この男の子」「年下の男の子」においては消えてしまっている。

オ／トコ＼ノコ（男の子）
コ／ノオトコ＼ノコ（この男の子）
ト／シシタノオトコ＼ノコ（年下の男の子）

こうしたことから，「上がり目は本質的ではないので，そもそも表示する必要がない」という立場も成り立つ。

その一方で，アクセント辞典には「ひとまず単独で発音した場合にはどうなるのか」という情報を示してほしいという要望も，決して少なくない。

そのため，上がり目（／）は薄い線（あるいは点線）で示し，本質的なアクセントである下がり目（＼）は太い線で表す方向で検討をしている。アクセント辞典の利用者には，上がり目（／）はその語の文中での位置によって出現しないことがある旨を，辞書の冒頭で十分に説明することにした。（塩田雄大（2012））

このように，第6回会議の席上での議論を経て，「第1アクセントはカタカナとアクセント記号（上がり目・下がり目）で示し，第2（第3）アクセントについては四角囲みのカタカナで示す」（ただしこの時点の原案では第一アクセントも重複的に四角囲みのカタカナで示していた）という，2016年版の原型が姿を現した。

3-3-5 改訂専門委員会第7回会議（2014年5月26日）

事務局側では第6回会議ののちに具体的な改訂案の作成を2年間かけて地道に進め，2014年5月26日に第7回会議（最終回）が開かれた。この

回において，事務局側はアクセントの表示方法をめぐる最終的な案（いずれも「上がり目は表示しない」という点では共通）を複数示し，議論を経て下記のとおりとなった（塩田・山下・東（2014））。

▼「上がり目」を付けることをやめ，下がり目のみスラッシュ（＼）で示す

（修正案に基づいた表示例）
あいあいがさ【相合い傘】アイアイカ゛＼サ
あいえんきえん【合縁奇縁】アイエンキ＼エン

第6回アクセント委員会では，第1アクセントについては発音をカナで示して，音調の上がり目と下がり目をスラッシュ（/，＼）で表し，平板型は末尾に→を付けることでおおむね合意していた。一方で，アクセント表示において本質的に重要なのは下がり目であり，上がり目はそもそも表示する必要がないという立場があることも同時に示されていた。

音調の上がり目・下がり目の両方を表示する方式でサンプルを作ってみたところ，ぱっと見たときにわかりにくいという意見があった。今回，「上がり目は本質的ではない」という考えを推し進め，上がり目は表示しないこととした。

▼平板型の記号を，「→」から「￣」に変更

（修正案に基づいた表示例）
あくりょう【悪霊】アクリョー￣

平板型であることを示す「→」は，「A→B」のように変化を表す記号でもあることから，違和感があるという声がアナウンス室からあがった。そのため，「→」をやめ，別の記号を検討することとなった。

いくつかの記号を提案して再度検討した結果，ひと目でわかるよう

な記号を考えると「 ‾ 」がよいのではないか，ということで意見がまとまった。アナウンス室からも，同意を得られた。

（塩田・山下・東（2014））

このような流れを経て，アクセントの表示方法に関して2008年に始まった議論は，最後の回にあたる2014年の第7回会議においてようやく完結・確定し，ここに2016年版のアクセント表示方法が成立したのである。この表示方法は，はからずも1934年に試みられていた方法と基本的に同じであり（3-1参照），80年経って「原点」に戻ってきたと解することもできるであろう。

引用文献

●早田輝洋（1965）「動詞・形容詞などの活用とアクセント」『文研月報』1965年4月号
●早田輝洋（1968）「日本語諸方言のアクセント」『文研月報』1968年10月号
●加治木美奈子（1998）「『NHK日本語発音アクセント辞典』改訂① 伝統を受け継ぎ，新しい変化にも対応 ～『NHKアクセント辞典』13年ぶりに大改訂」『放送研究と調査』1998年6月号
●三宅武郎（1935）「アクセント四段観」『音声学協会会報』第37号
●三宅武郎（1938）「国語辞書のアクセント表記について　標準アクセント辞典の編纂方法に関する私案」『国語運動』2巻5号
●日本放送協会（1940）『昭和十六年 ラヂオ年鑑』日本放送出版協会
●太田眞希恵・東美奈子（2016）「NHKアクセント辞典 “新辞典"への大改訂 ①18年ぶりの改訂で誕生『NHK日本語発音アクセント新辞典』」『放送研究と調査』2016年7月号
●坂本充（2008a）「『NHK日本語発音アクセント辞典』改訂始まる」『放送研究と調査』2008年8月号
●坂本充（2008b）「『NHK 日本語発音アクセント辞典』改訂基本方針決まる」『放送研究と調査』2008年11月号
●坂本充（2009a）「『アクセント辞典』改訂への要望　～現行アクセント辞典・アナウンサー全項目調査から～」『放送研究と調査』2009年2月号
●坂本充（2009b）「『アクセント辞典』改訂　第2回調査に向けて　～第3回『NHK日本語発音アクセント辞典』改訂専門委員会～」『放送研究と調査』2009年5月号
●塩田雄大（1998）「『NHK日本語発音アクセント辞典』改訂③ アクセントは［ウツリカワル］～アナウンサーアクセント調査報告②「複合動詞」～」『放送研究と調査』1998年8月号
●塩田雄大（2008）「アクセント辞典の誕生　放送用語のアクセントはどのように決められてきたのか」『NHK放送文化研究所年報』52集
●塩田雄大（2010）「全国アナウンサー音声調査の結果報告　～アクセント辞典改訂専門委員会（第4回）から～」『放送研究と調査』2010年5月号
●塩田雄大（2011）「『NHK日本語発音アクセント辞典』改訂　調査結果にもとづく作業方針の検討　～アクセント辞典改訂専門委員会（第5回）から～」『放送研究と調査』2011年3月号
●塩田雄大（2012）「『NHK日本語発音アクセント辞典』改訂　項目表示形式の検討　～アクセント辞典改訂専門委員会（第6回）から～」『放送研究と調査』2012年9月号
●塩田雄大・山下洋子・東美奈子（2014）「『NHK日本語発音アクセント辞典』改訂　具体的な作業方針をめぐる検討　～アクセント辞典改訂専門委員会（第7回）から～」『放送研究と調査』2014年9月号
●塩田雄大（2014）『現代日本語史における放送用語の形成の研究』三省堂